

労働者協同組合への私的関心

白水 桂三(東京都)

現状を嘆いているだけでは始まらない。もっと違った生活と、人類が生き延びるための方策を求めている人達と協同して何かができないかと、今年6月に入会したばかり。研究集会などに出席して自由闊達な雰囲気に触れたりしたが、実のところ判らないことだらけで言葉もない。さて、新聞「じぎょうだん」を見ても、働く者が主人公という組織はそこに働く人々の不断の努力の結果であり、決して規約や定款が保証してくれるものではない。新しい組織は新しい文化のなかに育まれるもので、文化の質に思いを致さない単なるガンバリズムや早急な事業展開への希求は、民主的組織を根本からスポイルしてしまうだろう。

働く者が主人公というのは、自分たちの組織内部の話だ。ところが、協同の組織であるからこそ良い仕事を生み出すという道筋があるように思える。これをどう説明するか? 勿論、内部組織の特質は外部への働きかけと無関係ではない。民主的な暴力団は存在しないということ。旧日本軍の残虐性はその組織の非人間性に原因があること。翼賛的で抑圧的な企業内労働組合によって、公害たれ流し企業や軍需産業が支えられていること。これらは常識だが、その裏返し、つまり民主的組織が社会的有用労働を生み出す仕組みをどのように理解するか。あるいは社会的有用労働を目指すことが必然的に民主的組織を創り出すのか。

協同組合は資本主義経済の揺籃期からの古い歴史を持ち、株式会社とともにその一角を占めてきたと言われてもピンと来ない。資本主義経済に最も適合した組織が株式会社なのであり、労働と資本と管理を分離したことが飛躍的な生産性向上の必要条件だったのではないか。その意味で協同組合の歴史は、市場経済の発達の中で相互扶助=協同が市場原理に抗いつつそれに飲み込まれてきた過程として捉えられるのではないのか。市場原理

を外れるものとして市場外に身を置きながらなお、自己の存在をかけて市場への参加を試みてきた困難な闘いの連続ではなかったのか。

「人類は利潤原理と市場経済に揚棄しうる地点にまでは、いまだ到達していない」という角瀬氏の言葉を重く受け止めている。(思えば、協同組合人というのは、不可能を試みている駄々っ子のようなもの。熱い想いだけを武器に、いまだ人類の到達していない地点に立とうとしている)

日本の労働者協同組合の主流は、働く場の確保を出発点とし、公共との接点を前提として、自立と協同を求めるなかで自らの思想を鍛えてきた。この経験が現在の協同組合運動を支え、運動に磐石の重みを与えているのだが、同時にその歴史の故に、協同組合運動が市場原理のなかに打って出るためには、破らねばならない殻、解決すべき課題は多いのではないか。

個人企業も含めれば、日本には1千万に近い中小企業が存在し、年間数十万単位の企業が発生しそして消えてゆくという。社会は決して固定化されたものではないのだ。そして設立される企業のほとんどが株式会社や有限会社であるとしても、それらすべてが利潤動機だけで生まれてきたものではないだろう。事業そのものために、また自立や協同や社会貢献を目指す場合も多いはずだ。しかし社会的有用労働を志向し協同を求めている起業家がやむなく私企業の形態で発足してゆくとしたら、労働者協同組合についてもっと声を大にして語らねばならない。誰でも気軽に設立し、参加し、提携できるような、ワーカーズコープの渦を巻き起こさねばならない。

我が協同総合研究所の会員が百万人を越え、年間の労働者協同組合の設立が数万単位になって、初めて協同原理と市場原理の対決が開始されるだろう。